



「学童期における
地域社会との関わり」

相双教育事務所
次長兼総務社会教育課長
佐藤 繁光

昨年度から社会教育業務に携わることになり、地域社会の教育力の大切さを改めて認識している。近年、地域の教育力が低下していると言われている。自分が子どもの頃の記憶では、確かに地域社会での大人たちとの関わり方は大きかったと思う。量(時間)的にどうだったかは比較できないが、少なくとも質的には濃かったと記憶している(どうか大人同士のつき合いも濃く、結果否応なく大人社会の一端にさらされていたのかもしれない)。

近所の農家の田植えや稲刈りの手伝いに駆り出され、お昼に田んぼのあぜ道に敷いたごさの上で食べたおにぎりがおいしかったことを今でも鮮明に覚えている。しかし、必ずしもプラスの教育効果をもたらす大人ばかりではなかったことも事実であった。無意識のうち「大人は怖い」という感情を抱いた時期もあった。おそらく半世紀前のあの頃は、地域社会全体で子どもたちを育てようとの理解が現在ほど浸透していなかったから、良いことも悪いことも含めて地域の中で大人と接し何かを吸収していたように思う。そして現在の基準で考えれば、安全・安心あるいは教育的配慮がなされていたとは言えない場合もあった。現在はどうか。近年は子どもたちへの教育について、広

編集・発行
福島県教育庁
相双教育事務所
南相馬市原町区
錦町1-30
☎0244-26-1313(代)
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/70610a/>

く世の中の理解や配慮が進んだ一方で、近隣関係の希薄化も影響してか、他人の子どもに濃く接する大人が少なくなっていくように思う。他人の子どもに接することに対する遠慮や誤解、あるいは面倒臭さ、多忙化などの社会的な背景も要因となっているのかもしれない。積極的に地域の活動に参加でもしなければ、地域の大人や伝統・文化などに接する機会も少ないと思われる。一方で、地域学校協働活動の枠組みが制度化されるなど、少なくとも制度的には恵まれた環境となっている。地域コーディネーターや地域連携担当職員などを介し、安心して学校外の大人と接したり体験活動の機会を得たりすることができると期待している。この制度が浸透し有効に活用され、子どもたちに多様な豊かな体験活動の機会が多く提供されることを願う。



◇教育随想◇
「復興とは・・・」
榎葉町教育委員会
教育長 青木 洋

榎葉町は昨年九月に町制施行六十五周年を迎えました。そして、今年の四月には六十五年の歴史と伝統をもつ榎葉町立榎葉南小学校と北小学校が統合され、榎葉小学校がスタートいたします。東日本大震災以降、町は震災前の原風景を取り戻し「新生ならば」を創造することを大きなテーマとして様々な課題に取り組み、復興を進めてまいりました。復興には形と心があると言われますが、「新生ならば」の象徴の一つであります笑みフルタウンやスカイアリーナ等の形の復興は概ね完了し、今後は、心の復興がより重要

なフェーズになってまいりました。心の復興とは何かと考えますと、町民の方々が笑顔で触れ合い活動するコミュニティの再生が思い浮かびます。そして子どもたちがそのコミュニティの主役になっている風景ではないかと思えます。

現在、登下校は基本的にスクールバスですが、榎葉小学校のスタートを契機に、距離を限定し、小学生は徒歩、中学生は徒歩や自転車通学を選択できるようにいたします。子どもたちが地域の皆様と触れ合い、四季を感じて歩くことで、学校では得難い学びを経験し、運動効果と心身の成長を期待するところです。

榎葉町の最も大事な原風景の一つが戻ることで、町民の方々は更に強く復興を実感されることと思えます。子どもたちの安全・安心が一丁目一番地ということを基本に、引き続き地域の皆様と協働して地域と共にある学校を目指してまいります。

これまでご支援をいただいたいております。全ての方々に感謝と御礼を申し上げます。



新しい学びの
かたちを
相双から

「ネット社会の

生き方考察元年」

新地町立福田小学校

教諭 寺田 英司

どんなに便利で優れた道具や技術でも、使い方次第で危険な道具になってしまうことがある。私たちは自動車を安全に運転するために、運転免許を取得する。では、子どもたちに情報機器やインターネットの世界に触れさせる際、私たちはそうした意識をもって使わせてきたのだろうか。

新地町は、早くから教育活動にICTを活用してきた経緯がある。本校児童のタブレット使用のスキルも比較的高い。これまでも情報モラルに関する指導は行われたが、今年度「情報モラル教育研究校」の指定を受け、情報モラル教育について教職員一同で研究を行ったことで、改めてその難しさと必要性を痛感した。

本校の実態調査から、テレビやゲームはある程度予想していたものの、想像以上に児童の間にインターネット動画

やオンラインゲームが浸透していることに驚かされた。研究授業では、家庭でのメディアとの付き合い方を振り返り、自分事として捉えメディア利用のルールを考える実践や、身近な事象からインターネットでの情報検索の落とし穴に気づき、適切な情報収集の方法を考察する実践に取り組んだ。これらの実践から一定の成果はあったものの、前述の実態を考慮すると一層の取組が求められる。



【メディア利用のルールについての授業】

小学校低学年から系統的・継続的に情報モラル教育に取り組む指導体制の構築。子どもが触れているインターネットの世界や情報機器について、教師や保護者など大人がさらに理解し、学校と家庭が連携して情報モラル教育に取り組めるしかけづくり。今後の課題は大きくこの二点である。

本校の研究に助言指導くださった中尾剛先生にご教示いただいた知見や最新事例を自校化し、今後の実践研究を進めていきたい。

一人一人の児童がこれからの社会的変化を乗り越え、よりよい社会の創り手となるよう、インターネットや情報機器に振り回されず、安全かつ適切に活用できる情報モラルとメディアリテラシーを育む。優れた道具や技術を賢く使いこなす力を身に付けさせ、情報の海を安全に航行できるように願って。

「青少年赤十字
研究推進について」

相馬市立向陽中学校

教諭 渡邊 英典

本校では、令和元年度から三年間の青少年赤十字研究推進校の指定を受け、「自ら気づき、前向きに考え、協働して実行する」生徒の育成を目指して実践を重ねてきました。

一年目は、「待ちの姿勢」の難しさを痛感しました。教員が何もしないで待つのではなく、生徒に気づきをつくり、実行する機会を設けていく大

切さに「気づいた一年目」でした。

二年目は、経験したこともない状況に対して、先見が行き届かず、明確な見通しをもつことが困難でした。しかし、コロナ禍でもできることはないかと、諦めずに「考え続ける二年目」になりました。そして「実行する三年目」です。研究の集大成として「福島イノベーション・コースト構想」、「防災教育」、「生徒会活動」を三本柱に、JRCの視点を取り入れた活動を行いました。

「福島イノベーション・コースト構想」では、自分たちが住んでいる相馬地区の新たな魅力に気づきました。さらに、自分たちの未来について考え、故郷とどのように関わっていきけるのかを発信したり、提言したりすることができるようになりました。

「防災教育」では、避難所の模擬運営を行いました。生徒は共助や公助に関心をもち、避難者や運営側との関わり合いを大切にすることを学びました。進んで他の人々や集団、地域の安全に役立つと、思いやりのある優しい行動が見られるようになりました。

「生徒会活動」では、執行委員会ですべてが活発な意

見交換及び協議をすることによって、新たな気づきが生まれました。さらに地域貢献に向けた活動実践につなげたことで、生徒の自己有用感・自己肯定感が高まりました。研究推進の指定を受け、我々教員も多くのことに「気づき・考え・実行した」三年間になりました。生徒と教員が気づき、考え、実行したこと、を今後も全教育活動に浸透させ続けることによって、赤十字の目的である「困っている人がいたら自然と体が動く」という無意識の善意が溢れる学校を目指していきます。



【避難所の模擬運営】



「小中連携で 英語力アップ」

南相馬市立鹿島中学校

教諭 太田 しのぶ

本校は、今年度より三年間の「小中英語パートナーシップ事業」の指定を受けて、鹿島中学校区の鹿島小学校、八沢小学校、上真野小学校とともに、児童生徒に英語で自分の思いを表現したり、互いに伝え合ったりする力を育成する取組を進めています。

事業推進にあたっては、区内の三小学校と県教育委員会義務教育課、相双教育事務所とで、次の二点について共通理解を図りました。①小・中学校間の情報交換や互見授業、授業研究会により、小・中学校が連携して指導過程においても接続を目指すこと。②CAN-DORリストを活用してこれまでの文法ベースの授業から行動ベースの授業に転換していくこと。特に、初年度となる今年度は、「小・中学校が互いの授業から指導方法についての良い点を学び合う互見授業」と「学習指導要領・教科書の改訂や小学校外国語科との系統性を意識したCAN-DORリストの見直し」をテーマに重点的に取り組みました。



【ALTとの授業の様子】

自発的に表現の質を高めていく姿や生徒自らが学んだ英語を使って授業を振り返る姿、評価問題を用いたまとめの活動に意欲的に取り組む姿を評価していただきました。これからも指導内容や方法等について、小・中学校間の連携を深め、互いに学び合いながら、児童生徒の英語力向上を目指していきたいと思えます。

「北から南から」

「今、そして未来の浪江町」

浪江町立なみえ創成小学校

教諭 鈴木 孝成

本校では、三・四年生が「ほくたち わたしたちが考える未来の浪江町」、五・六年生が「ゼロカーボンシティ浪江」浪江町が目指す環境に優しい町づくり」というテーマで総合的な学習の時間の授業に取り組んでいます。

子どもたちは、震災のことをよく知らないというのが現状でしたので、震災当時の浪江町の様子を調べることから学習を始めました。そして、三・四年生は、「浪江町にこ

んなものがあつたらいいな」という願いを込めた未来マップを作りました。その中には、総合的な学習の時間で育てた「親孝行豆」を加工して料理を出す「豆カフェ」や、町の花を扱った「コスモスフラワーショップ」などがありました。

五・六年生は、ゼロカーボンの取組について関心をもちました。外部講師の方による出前授業や企業への見学学習を通して、水素の特徴や活用方法、節電や植林などの地球温暖化対策について学びました。また、請戸小学校の跡地で植林を行い、ふくしま植樹祭に参加するなど、森林環境学習にも積極的に取り組みました。



【出前授業の様子】

これからは、学んだことを生かしながら、自分たちができる住みやすい町づくりに貢

献することや、SDGsに取り組み、浪江町・福島県・日本・地球の未来のために行動することについて、更に理解を深めて、多くの方々に発信できればと思います。

「未来創造学」

福島県立

ふたば未来学園中学校

教諭 新田 健斗

本校では、全国各地から入学してきた生徒たちが、双葉地区を「第二のふるさと」とし、未来の地域や社会の姿を思い、語り合う学びを展開しています。一学年では、「双葉ふしぎ発見！」をテーマに双葉地域の「魅力探し」をしています。富岡町の「火祭り」や檜葉町の「鮭」、広野町の「バナナ」、川内村の「ブドウ」など、ここには書ききれないほどの魅力を見つけたいです。「二学年では、「双葉どうでしょう？」をテーマに一学年で見つけた魅力を外部へ発信する活動をしています。あるグループでは、広野町のみかんを発信するために生産者や企業の協力を得て、長く地元の方に愛されていた「みかん大福」を復活させ、店舗での販売実演を行いました。ほかにも多様なプロジェクトを



【広野町のみかんを発信する取組】

進めています。三学年では、「How do you Like Futaba?」をテーマに二学年で行ったプロジェクトを海外へ発信する活動をしています。海外への発信をきっかけとし、今後の世界や社会について、外国の方と対話を行い、多角的な視点を得ることが目的です。探究活動を行うにあたって特に大切に行っていることは、生徒の興味・関心から探究を始めることです。地域の方々の出会いや教員との面談を重ねることで、多様性や深みのある活動を展開できました。今後、より一層広く、深い探究ができるよう生徒とともに学び続けます。



「双葉地区の学校として」

福島県立富岡支援学校

教諭 山田 真里恵

本校中学部は、平成二十三年度から聴覚支援学校平校敷地内の仮設校舎で、平成二十九年からは四倉高校内で高等部とともに学習しています。

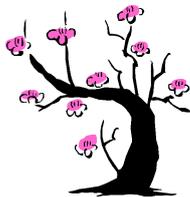
そのため、双葉地区の学校がそれぞれのふるさとについて学んだことを発表する「ふるさと創造学サミット」に参加することに、戸惑いがありました。しかし一昨年度、本校の様子と、いわき市の郷土芸能「じゃんがら」体験の様子を展示や動画で紹介する形で参加した結果、現在の本校について伝える機会として有効であることがわかり、昨年度のオンライン開催を機に、生徒たちの代表が参加することを決めました。

総合的な学習の時間では、昨年度より、現在の学びの場であるいわき市四倉町について学んでいます。今年度は、外部講師から四倉商店街の話聞き、興味のある店ごとにチームを作り、調べ学習を行いました。タブレットを使って調べたり、お店で質問した

りしたことをまとめ、「おおすげ祭」（学習発表会）において中学部全員で発表しました。サミット後には「緊張したけど、頑張りました。」と振り返るなど、画面越しの発表でしたが、発表することに自信がもてたようです。令和六年度の移転に向けて、双葉地区の各学校との間で互いにわかり合う機会になるように取り組んでいきたいと思えます。



【調べ学習の様子】



◇編集後記◇

お忙しい中、原稿をお寄せいただきました皆様に、厚く御礼申し上げます。

「ふくしまを十七字で奏でよう

絆ふれあい支援事業」

【最優秀作品（絆部門）】

息合わせ 奏でた夏の日 忘れない

中村一中 三年 松本 莉桜

残響音 しみてぼやける 友の顔

中村一中 三年 羽山 菜子

【最優秀作品（ふるさと部門）】

とりもどす 自然の光 ホタルの灯

六年 小林 桃

復興の 稲穂がゆれる 田園に

母 小林 智美

【優秀作品（絆部門）】

おふとんを そつとかけよう ねてるはは

中村二小 二年 目黒 翔太

本当は おきていたけど ねてるふり

母 目黒 京子

【優秀作品（ふるさと部門）】

2年ぶり 騎馬武者姿 勇ましく

中村一小 四年 佐藤 太一

駒音の 響く行列 宇多郷に

祖父 遠藤 満雄

料理する タコのラベルに 相馬港

向陽中 一年 青田 姫來

人々の 思いを紡ぐ 海産物

父 青田 健

【佳作作品（ふるさと部門）】

夏が来た 旗を追いかけ 馬かける

原町一小 六年 豊田 聡一郎

朝まだき 常歩速歩 出梅の頃

母 豊田 明子